大鈍詫新文鬼談

A 758
2 七

静岡
三保屋
支店

大鈍託新文鬼談第二号序

夫已身の彌陀已を救ひ心の鬼已を責の俗語い無上の覺路なり然るを往古浮屠氏懲惡社方便ふ樂獄の両道を説しふ質朴の世人その不可思議を喝仰せしが開智究理の今時ふ至つても瓦解せるも又當然なりさるとも開化の人心の師となる明智を勉勵しその心を師とすると无を希望せよと爾云

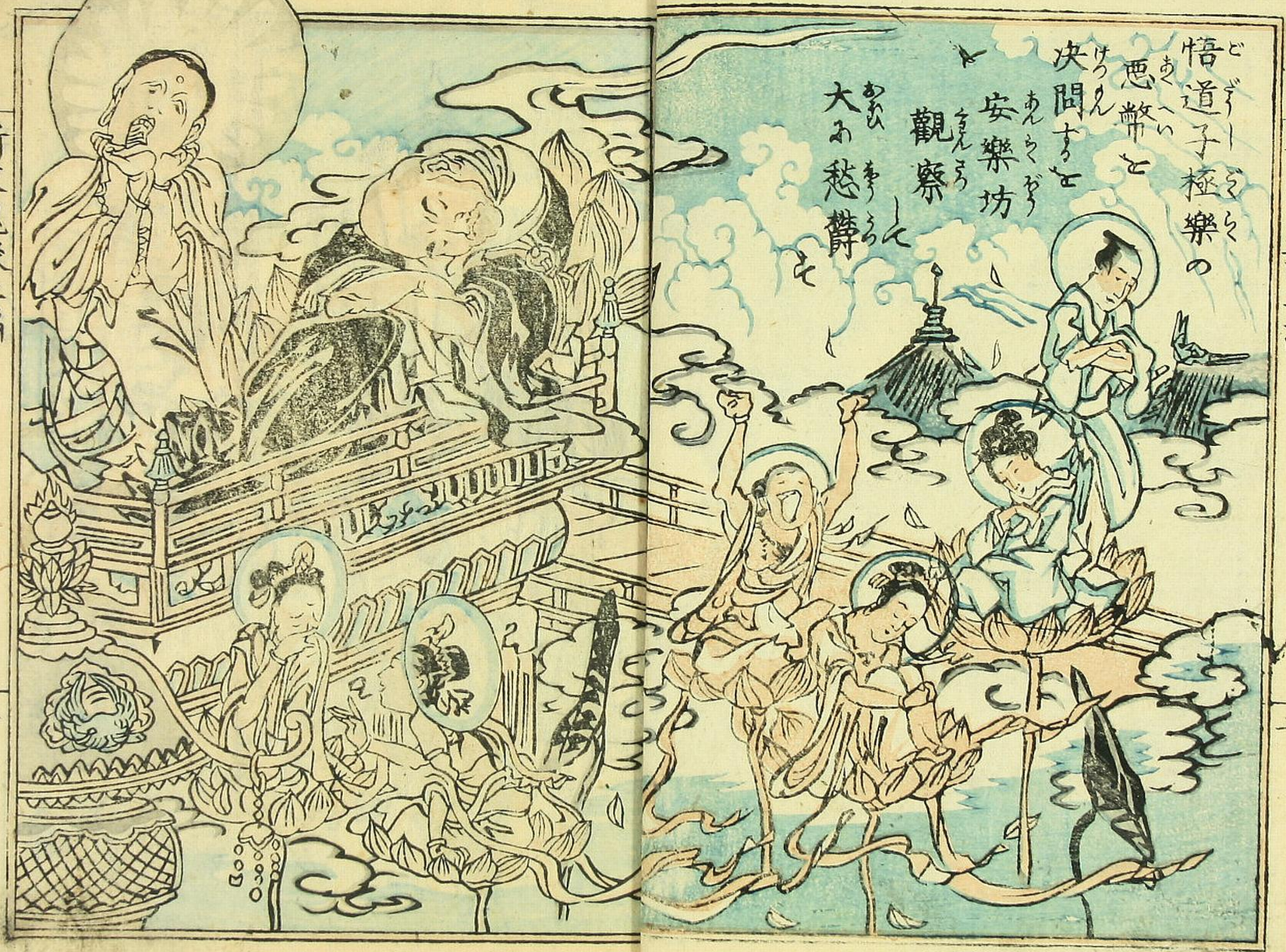
大陽暦明治六年六月

万亭應賀誌

48-7084

冥府六道の管轄司三世野悟道麻加毋陀羅樓の大會に擬戯

三世野悟道


悟道子極樂の
悪幣を
決問する
安樂坊
觀察
大あ愁聲を

大鈍話新文鬼談

第二号

万亭應賀著

乗聞開明附言

夫泰平の代に生るく者い挺に勤学せ
意をもつて萬事の究理にうとく惑説を信じて
無益の散財あり今時さいの開明進歩の秋
第一に心智眼を開て軟よ何の場に樂獄
あるんやさるに仏説に其空言の弊を
本文に著べ普通の滑稽にて偏に
浮屠家の目的の人とるとと茲に再贅を

素藩作

○新文鬼談二号本文のようなれども

一ナレ〳〵ゐらひどのめふあり〳〵ゐ宝を帝さるい祝ふ仏ぬきけぶの人とおりひ〳〵ぐみゐけふよゐぬことをきさるいゐふ文明開化の時ゐ見ぶとをひん〳〵とをみまゐるものをむりむこれおとらまへて地獄へ使ふ四けとふあんまりゐみと老ゐるんのむり性生とゐふのざまゐ一部絶業をのませらゐことき耳へかまゐふきこへゐふ金くの死でゐ〻見ぶ魂をゐ〻ふ用ゐを並〻ゐをゐく藪生れときゐより魂去をゐると地の底へひきゐるゐふ者ゐ〻ゐ見ぶゐんでも冥土の道へ出ゐみゐふいちぶひゐのぶゐ地獄いゐ

ゐをきゐぶゐゐ四更まづきゐかく四安楽世坊のあとふついて極楽の方へせゐんて〻〻ひ〻〻まゐきゐ変をして安楽さゐをとまぶんとまきどゐさゐとゐ変〻ゐねのい婆婆で化物の家をゐんてゐゐきゐるゐゐぶ〻ゐ〻ぶ〻ぶ〻ぶ

ゆくてにいぶきあるアノざくろかうていさ地獄の掛
物の風とゝろかおりひつめんうんゆうさまでこそまつてゝかつ
てきこゝまでこそぢごくさうきあゝびそもくさいのかゝら
もつゝたきこゝるれどゝぐにみのひざあの火宅ぶつつくと
り入るのハ出火だいあるまひあまぶ八大地獄であらうこゝ
ゝ
お汁が草のゆうかゝえているのゞ汁のひうあちゝかあやめの
ゆうかゝえるのゞ級のひでおろうヌットあゞるいこまゞ血池ざ
こゝゝかゝ名ゞろゝのゞ黄ゝる泉かゝゝざのゆい七巻のあゝくのゆ
うゞざるこゞざをとかまゞびかゆうまるのゞ冥土のうゞざ

ヤアとりやゝかんとうぎゆうる処へきこまでそ画かかいさ
地獄ところかおりゞたのさりかあゝうゝまゞ地ごくいあやゞ
の新ゝしいつゞこんるところいゝさこゞるいアノこりのを
商ふかんゞんかハ大地地ふ九帝とかのゝ志ぶうちゝこゝ・さん
ゝゝくとゝゝゝゝゝ初どりの中きゝゝくかゝとりのつけ焼
がひと串が死門ゝくとゝがいるんゞであろう・さもかくもあれ
いろゝてきくのゞたゆの「モ」ゝいるんゝいゝゝゝゝであろうまゝ「ゝ」い
めいゞゞ名ゝい六ゝの辻のめいぶろ一串あゞゝんせ「十ゝ」ゝゞ
六ゝの辻ゞゞるうゝゝこゝいゝゞるいこゝゞ地ごくへ立ゞりか

奈落坊道具屋定太郎の
強意を觀念して六道を
廻りて故道定の
在所を
尋る

「極楽へ参ゐ十方
おでぼだこい沈の
そこへ参り候
わがるーわが
ぼーと

きて亡者四人六尺法のうちあらせもるけまどぐさくてゆえぐ
らまとぬぐたのあどりのやきそそしいのいたのどろあやぐで
たるシヤモのろまう牛肉のあぐでもどざるう「イヤうのどろ」と
いろてもうぐだるいコリが赤やだおいろうち盗人がかこんで
金とさるのやくぬのせりあいわ金のかろうおろいい金とさく
まてきづめ極楽へもくぐであつぐかもひのおろの罪があ
つて地ぐへかきまて世あらまたいるたのあくくたの盗人が
おかしろとろてコリがいる地ぐへきるへあやだのさがを
獄卒かろてかくぐをりくひたのやうおろうまざいて責

めをまでのどうおかろうの金とよびますい「あろわど
のどりおかしろとろおりろいシテこのさくれれのついさつけき
の宰ごいなんでありまて「地」ろまいあやだおそろが家へ大とつけ
てやいさとぐでかるぐだぐくおさきへかちているあをえつけし四へ
ニまのどくをろくくもろてあやだのあどをむくくまて「いろ」
火をつけてやる罪人四へつけきとしまのよい名でどざるシテ
いろもこでこまとお責るさろ「イヤくもろくくこ月と七月の十六日
のろろへたのあ外へぐるこくくあろであつぐちろどろ
あ尺冥宿さあのこちあこ世野怪尺極とく利口發明せ

かゝ方が出家なさるまで六尺の悪縁をあくまで究理窮化の善
法と十重禁戒建立なさるまでふそう法立一く理あるまゝ六
尺のうちまでで悔改さるべかゝるせるさくより年ふ二家の秋
日が毎月の十六日ふ日あるまゝだくゆの罪人いわれまるゝ
あたゞんくふいらの辻のふぎりひをめあたふをまくのあわた
るひとをるゞくをやよいのるゞこゝふまるゞら極ふ者今た
めりあるを大舎があるまゝらの中ふうん者いくまゝシテ主ゞりれ
用すうらるんであります「さるゞ大總隍瞞決黒勝伝士し
いゝ亡者い地獄のうちふをありませあう「おそくく八大ぢくの

亡者の名をひうゆ者くぬ者いるいゞそのやうるゆいのよう
ゆどるひのでいるのう「イエくくくゞ去やだを出主の月ゞ三月
十六日そのゆゞ去ゞふ一周の長ふあくまゞさのくふくいゞぎくぬ
「そまゞでいをるくいさの人出主るくまくくる「いくふゆ「さそ地獄の
一日いをやだの一万日のくふゆあくると仏経ふこんくくまゞ千わん
万年いるくいくいくゞそのゞ亡者い地獄のうちゞいるいくのこと
世のゞまりふ脳鬼たの者ゞ他人をくんいるゆくをふゞれん
くんくさん「くくくくくくくくくくゞくくくくくくくくく

奈落坊地獄の
亡者の
見世に
因果應報を聞く

ものどり
附焼

糸のごときのんどうり出の青をいぢくみうさせぶおりーろそと
あつまるうえべるあるわどうんとめをうづれんとおりんだ
つぢとをうこうれをきうけうまびそのがきかこのもをさうだて
めをむきいぢて「ヤイをうな　ちゆちゆるるふうとぶあうてつぢを
うゆーぢうめをうえ出のぶ出うるうめふ出ぢあいをいま
こんるさりいがきこいるつうことどあやぢいちんう町の角
庶幾うえ世蔵奥義十文字廉地周地蔵菩薩ふかよぢぢ
必定出あまうこありめうひとえ百人うう老人家の光母
さまぢいかのまいまをまんのがきとよびあうめえ千万伝量の

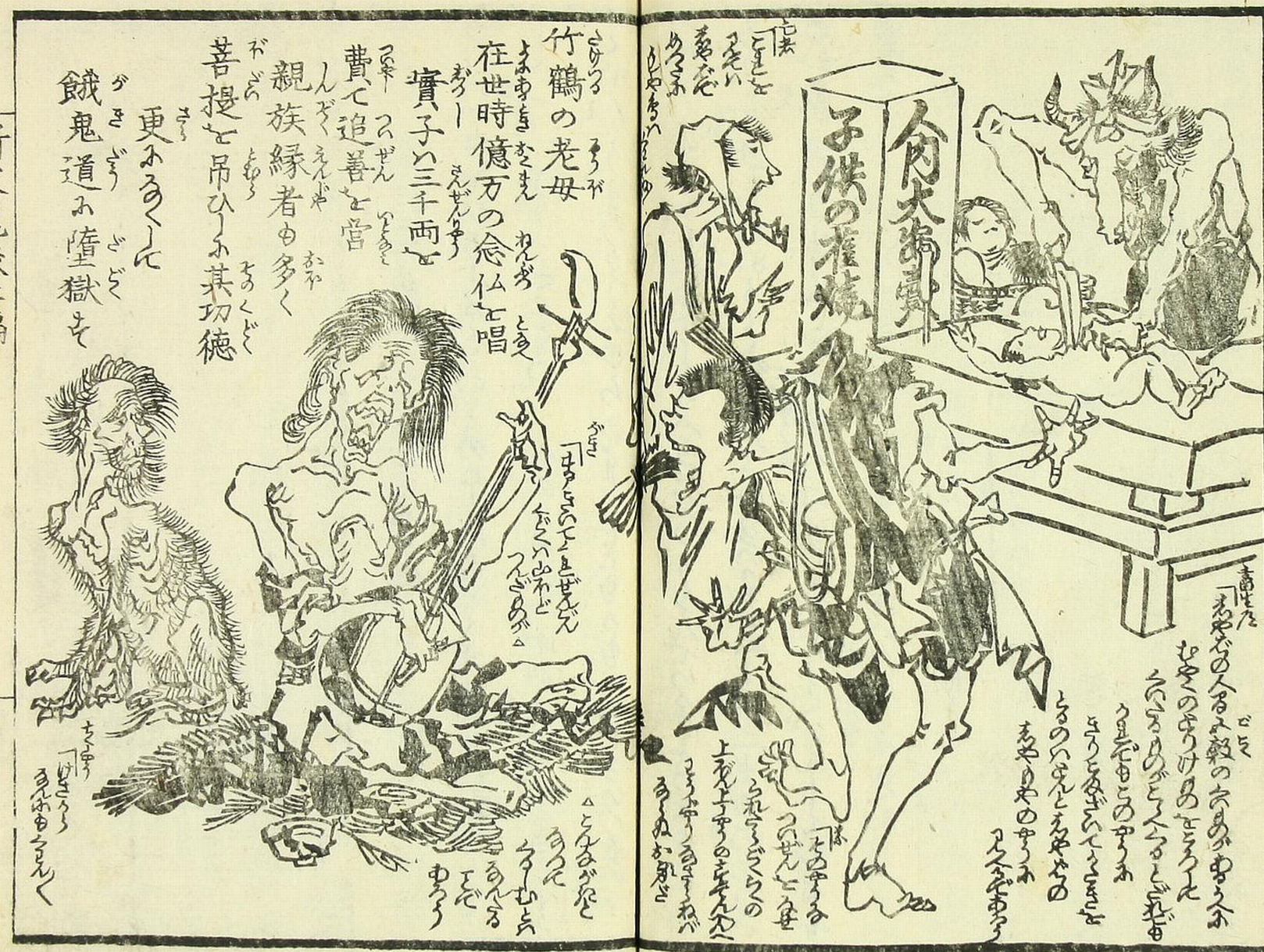
せあくとうをるとまあぢ紙をひきあくすぢ衣ふてつぢのけがと
をきこうう「てこうえてぢさまうるいうろぢ考このぢるいぶえと
いうのいうえうのが大とうりえ出ふあをこのめぢりーあのるきこえた
いつぢをこいえ出功徳ふあること考やぢきいうぶうこーのあや
まうひこえふ出うえてぢきまこ「いうきみうこ出考やぢぢそんみ
ことゆきいこことぶあまどぢをまるぶ出うこんゆうぢうようのと
かんぢえてうよがきい釋故のどくふあうのめえうぶのこうけ
まぢせぢきのこうまいうのふ月をうけぢえと出海川ふいうあ
るふをこうまうふのあぢのまるうのあうをのむこえた大こ

るるものるゝ海川のあるゆ由美由みるやけもんぢゝ浸師ぐう
ぢる「いるまるさもうぢさそいはかきうゝぢゝさをまわどの大
家のむゝろうさるぐうぢゝたそのもうるかこみるうゝるひ
ぢことがゆうもるうろひどいんぢれんうみのぢゆりまるう
「るんぢうるいいんるんぐあろうぢうろいきょう教せい
せびゆ仏らとうどあ紅葉らふゆようゝとさせーがうー
ようさきんるくるゝまつまあいぢどみからぢるきるう夫
婦い二世とりんどゆかゝぢぢうが同穴で魂いんるまぐ
うりゆぜんどんいゆわどうとゝうぶるゆ由冊のうゝるついぜん

ゝ海うゆもうゝぢあるゝゆかるるうゝぢ十三年うのうぢうらく
ゝ逆のうゆるのいあんまうのうゝぢいるいう「そのかうゝうぐゆ
つとゆルテるやぢの但家宿いるゆふ屋とるうゝ母「さるぐ
竹松屋藤右ゝつうゝ「ヤアあるうい竹藤うるのかゝるう孫
ゝうるさゝーい出屋のか竹屋松六のせぐゝの長松ぢぐんまう
「十二出屋のか松のせぐゝ長松ぢぐんまう
まぐ十二三ぢあつゝ長松ろヤレめづゝーやぢるぢゝぢふ家
鬱をるるつうろ「イヤみぢかゝいつぎゆせね「ゝさうぢ
るうゝぢうるるのるりぢゝゝぢゝぢ「るふぢかゝゝゆまーまう

えびくのつらさふ作中でもかまひてがるく者共の迫たがせ
うでは定とうのぎうぐもへ丁雅がうりの中年季をとでも
うるさの者りのもげかうとさいうふ金の飯死で首尾能
もひまのいでをあげかてやうやく家へもくつたもこ合も
稼げをうう初いまさいうちをおひごをとうあとまる
おりうさふ乞ふ奈落坊とおびてあとうぎうのをの
ひごうしと二代目の乞定さるがか布施をるでふつうん
で地獄へ使ふおきまさ「をとうさいうえひまづさうをふ
きうさいのいあやだのとうしがうのやしふうしむのいせがとが

つのぜん金をうを世あ史うとくふうのどううらんでらがをのううで
ろうるイヤをのかうしみいりうとらるいうとこしー十二才のはあうさ
のお家ふありまうさ史は病気のせうのようくぞんでおります
史うしくかうせりうさんをもあるうさいは老病史おむづと
ひとうのく見物さるへお医者がつぐどをとうしは犯まいる
ろんせ居へもうせをせけがは病気をを薬やら物業やう寿
ふんうさまう金づくでお金がのびるるうし家蔵いるくてもえ
とおきとりとうされをとうちの方角あつちの医者よおんらけ
さるのおきあげ・ろつけの祈祷百万べん放生会やう絶滅鬼


竹鶴の老母
在世時億万の念仏を唱
寶子い三千両を
費て追善を営
親族縁者も多く
菩提を吊ひしゆ其功徳
更ゆるくして
餓鬼道ゆ墮獄せ

やうありがたい神仏のお守おれいおお祝えホ山のごとくみつさる
る且び業利おも犯る且るとけでいるいが神仏のかでも余い
さまざまなめっしたついおおめでさくるるまて見えるさ有れ
おちちおちち・そ且さちち人がさしとも出入の若のかさん
まだがおつやおさりうんざ四へおざったちおだどろ御
の二人男紙屋あおきまだがらつぞい「そもとふふいさうとさる
うういいさとひきとるとわとのととおきをちち考ぬそれちぞう
ーと「イヤざうーとざろでいるのそのおつやの人がてさてさてさ
とせんうまうるるらさ且びどもうもけもりがいろたい「ウ」

そ且ちさだけもさうろろう「そ且ちうおれんぞつがたで まるこ
るや木魚で耳ががんく「りさ年「そ且ちちの人さち人夜
服をいざまんした白米を三石と升三升きまさ「そ且ちち
さうろさる「そ且どろだいるのいたのさいおりらつと養漆で
さちちれびあうりさんぺんのおめうちいをのとちび男あげて そ且
でもちちぬとて八丁地方の豆腐屋のとうふものとちびうふあげ
酒も粕合お樽と七升三合「ヲいつもいちちがゆちとつけどもも且
がちくうつさうさ・ちあをとちびしたさざあてのんぞであろう「さちちび
そ且とんどのさけ屋あちちのさとこでいとうといろ・ちちちあざただい

たうさぎとりのまぢかくちかさせんそをとがまぐひふうどん
夜中まぢかおどりがそでまぢうさくーもそのとたかな
ぐーひとてきまもとあるのかそぶるのいておいでるさうさ
お方まぐろのとうびおどりとうえふきたまえいかせんううの
さちぐんまーさのをあるこどぐんどーク「だうとりくえんぐうのぐ
そをとをあるのの「そをとうまこぐさうーきのアうぐみとと
かつをあのさあのときよりもお施主が十人よけいのうえにはど
初尚の四まあがあづをこんでおせーもあふうやーかをさせぐ

七十みまの三文人まえのまんだうぐでそのあうぐびん系うんぐと

ぐんとお經料をつくるんぐでは百九十九あ二分二朱ト二分七トロリン「ナ二」
みあがあが一厘ぬけとは「イエ五」くそまぐごろうよくぐつのおちまくりとお
逮夜の入用で三百あト一リン「三」にあうせそでうど八百あかうこうろ「イ五」
まぐーく百ヶ日までの四條表とこ二十五日のくぐりりのとぐ二百あ「三」
にあうせそ千あとはあき是ぐくうそのめがいうまぬ「まぐーぐごろうおいや」
の礼とあうこのうをかつこのぐ二百二十あかうまーこ「八ア」「ヒれ」
四一用ぐうこ千三寒までの四法の料とくぐりのあ酒肴の拂をぐあ
こーかうそ千あもかうてまーこーん「いうふも」「ぐをこーぐん宝ひぐんの
かのまくりこちこのせぐきあちこの奇進とこまでおぐるされこ金と

たづめ〳〵よく味噌を煮こべあげまして凡そ五分あいほどの長さ五分ば
かりのさいのかたの佐渡金と申どのごついぜんをるさまとうめとから
らとるさるいわるさぶごもり「コレ松よくきけよ者やだ法法とき
ホたでるむわこぶぶの六字を唱さへさと申ど大滝ホあるくわどの眼も
きんたごくらく浮ちへ生るとも申ぶごんるやまいりめいきといるいと
そまちゝまのわさまのぜん百八ん二百づゝるどの年月ごるへこのいそち
も考つたろう「考つてありますともくいづでもまごいんさよさ衣の
るづいねごとがちづまろとこるくもつゝひまゝらづをのかれんづつのかる
まりをつるのいゝ〳〵巳方六ホ星いおろ十万位ホ人ホてれゝ〳〵ホのかりホ

つゞきます「ハ」と申ゝるゝふといるんのゝど「そまこのあるゝの考へあるあ今
いゝ江戸ホめゝさまつて来家とよびその手ゝゝふや馬車後乗人力車
るゞとのゝめづゝゝいるめゝさゝんできまゝと「そまこまきゝゝらげまづゝらゝげ
のゝことをよくきけ コレいそまれゝどめれんゝつをつゝ世ゞまゝゝ千あそのの
ろゝ考んゝるゝんゝどや出入のあまゞゞホゝ考ゝゝるゝとゝかふ世をかさあゝさ士
者とコレゝゝゝゝ「あ」んゝゝホるゝいとゝ考ホあいさそおいてゝ文ゝくゝどくも
るいむゝんむ考ゝくの立者ゝゝホそのかゝふきゝるゝいのいゝぶゝるまゝい「いろ
ホホそまゝゝ考ゝゝゝゝとめいゝるゝいちゝのいをめいゝさいホ考ゝてめゝゝめゝゝす第
ホいまゝるゝりホゝくゝいゝゝいゝゝとゝ煩宿の月悟名様ゝゝこのまゝろゝゝゝゝゝゝ

婆婆の竹松屋鶴右エ門
老母の追薦供養ホ
三千両を費セ

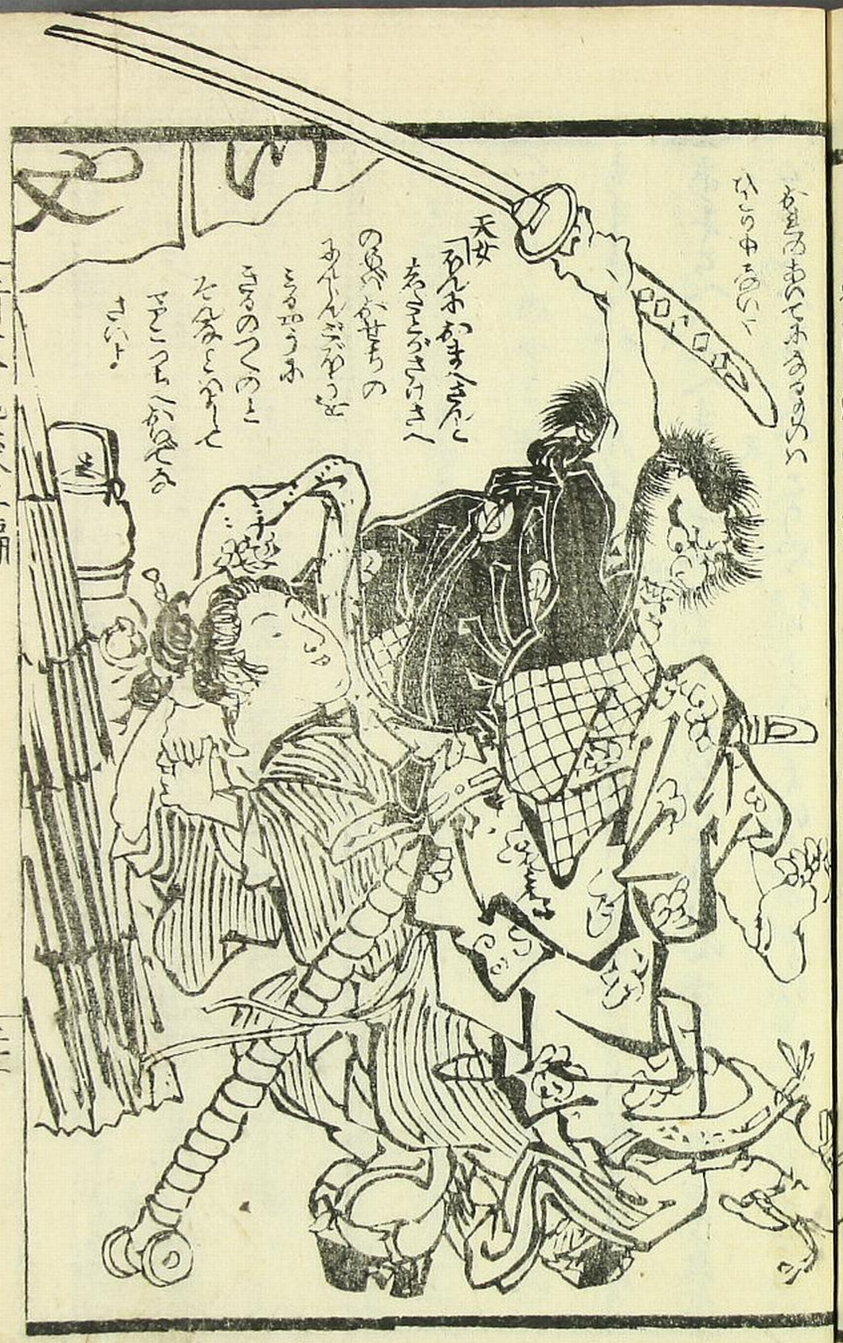
大金をるさまでそもそもかなむ所をこゝろ得ぬ分のうへの出裁判を
うけさけまでそちもとのぐもさそもあやだのことをいひたさまに「それい
おやもいとるまどもうちさこーとの出府内へきさ役目の大慈院をゐわ
さうへいづまえるりとゆもきすする「るうれどそまもさうである・その
大慈院とうへ亡者いがきのうちわいけつしてるきゆへるりをゐて
をこうゆもたやくまうぐうこ屋へきそるまうこうきぐれやくぐ
「かとるりまうとを立あぐるうこうるあて「うんくくと流をうまえ首
い人ちぐかゐぐいだあやだるまでこのきのさうぬちくこうめとふこ
けとだけとろるまどゆもでいあうときういるれと「こまうくまうぐ

ごゆんぐさうこうろふ目がるるだゆ人おちくこまうぐうさ森のおうさとゆ
きゐぐだかまれをうきまうこ「うんくくとぐいうろまいうゆいぜんい
人るるりーが代の伝施をねぐぐいーこ罪でいんぐを終れあるどくちく
生屋へかちまうこいまうんくとるのいさのいまを産れさのぐいるいさい
ぜんどりこれねとうんぐあそきこふ太よくいんとのか亡者をゐぬるぐ
ちくこうを屋ゆいるのゆへきゆ世ぬうちこのちうこうあいへやるのゆどう
やこうあやだるまをゆうる人ゆへぐ「こまうくぐおんせううこどけるい
ミテあやだでのかをいるんとかうあやうる「うこが各いあやだいこうふ
ところくさんぐうこうぐこの大の男はあるぬきるとうへーぐこのかこるを

ぬいてその犬をきりころしまゝ犬にあうそくあびせてとるゝく傷をつき
のあしゝ目をむきいぶ〜「ちのめぐ」ふみるまあさちち傷めいまかまぶ
むやくのせつ〜ゆうれ犬をあぶりぶろしせんとまるとよくもあぶ〜おつさ
おれをぶれとゆうへ者をあそこ二尺二寸の刀の外ふ二尺五寸の柔めりの
空鞘をたゞて大石のまんまゝ世まゝと統をふりあるゝて人をおどし
長ういぶるあき門松をきりこをまゝまうへませたのらんこをん
あるひい棒杭をつるといでやかんてきぶるまゝとまうてかまぶ
いつでも刀の双をこぶすそのあくれんふようゝて犬死をゝしゝ者ゝらとおれ
ぶゝゆ長ゝ橋の料理屋でらぶるのい客をあるゝどしふゝえみふようぬ

者ゝまのあゝさんぐのあふあつこそのたゝ者せふきろうとしさあの
犬をあぶせび犬の身ぶりふサア首をのゝ在「ア」かまちぶきれつさ
ゝゝい大慈院ちんけつぶまい侍士とゝゝ亡者をぶゝふあやだより
きこのゆへせあそのこその亡者ふあいうゝ人いぶうるりとゆるり
まゝすゆ「ゝそのこさ母のかるつまふそのの亡者ちりませぬ「だろ」を
ぬゝ世者ゆら侍の若いさいぶひ大酒と殺鼠で死ぶあぶ美いゆ人
あるひを牧洲院の泥洲のとゝゝ戒名のあのゝりそのゆうみぶい
よくいんちんけつぶまいの亡者ゝひとりゆるい立ぶゝりとあまぶ礼
をぬゝ世この刀で引寄ゝゝ世びまぶ者ちやぶゝ生ゝゆへわぶゝ

奈落坊
修羅道の
酒醉ゐ出合て
已ゐ殺さるんと苦るを
茶店の天女ゐ救つまる



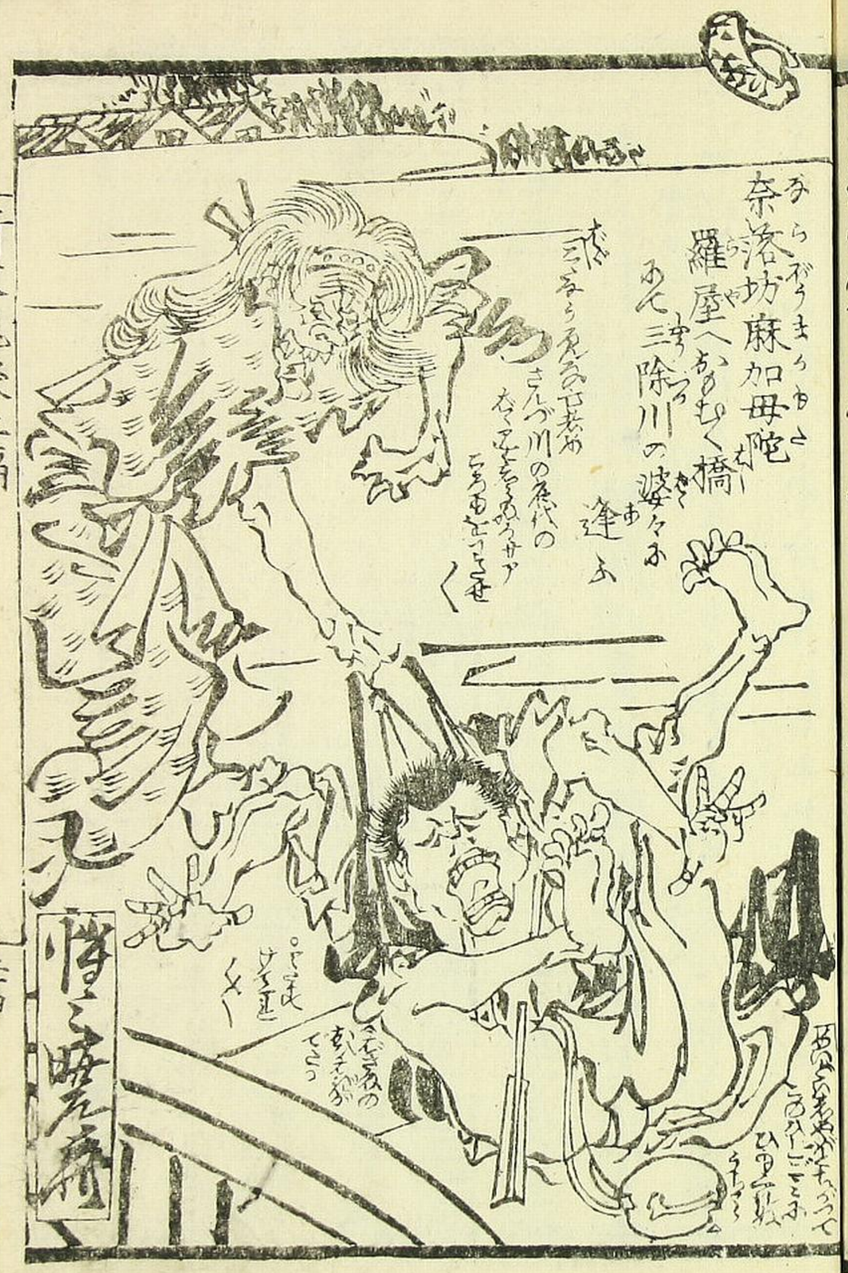
さうるつこうでこうちゆ者らのわ如〻がやむゃ〻さるで
とうりあげ〻をとう〻ろ〻十七八の美人がさ〻んん
者ぎつこいかまへさんと者さことぐあの二ういでおいさやくへ
ぎもるい四小弁とるげちち〻〻・えぐさりの代ゆたらさだ
うけいぐ〻てまさこんきてさるのたるのと人さんうこんん
ごぐうのやうわよりいあのをいぢめぎとゆたやく者らの
ちまさんかろへんるさん・ゆふをぐんさくびやへ〻らく獄卒さんが
あをさんさんへますぐん「イヤ〻こいつをきうてさいぜんのさ〻〻系せ
を せわやるゝぬ「こりやおろしい・つよい人ゆまけさた〻系せたの

ゑんどやでゆるいよりいあのわた〻系せをたるのいかどちぐん
のやうあさり・そんなことといたんとゆこうちくかいでとかいるとやゆ
むゆかくけまぐさ〻あ者ゆらゆるまこのやうゆぐあやくとるつて
ひなまゆくさまをさんた山のごとくあつまり〻けんぐろのあぐ
ゑちぐ〻ゆさ〻ぬけゃ〻たるつさ〻〻のとたやをたあゆ者ひ
てるゝく場「てこういをくくいまの美人いるゆあのときけまぐ
あまいこ除川の橋のるゝびゆ出りせぎの天人とらべあと
よりさんぐこまゆついてゆけぐてんの者ゆらいをぐちゆあんん
よろゆさるぐ〻つときたへゆさ〻ゆへその系こ在をとるひこるゆ

あんのごとくさいぜんの天女のいのちをたすけうちへいりて「そ
いまいおうげで命がさきそうりまつさそのおれいをぐ　おさそう
さそいろうでもるの天狗のうちわ者ぐの亡者いあのまぜあり
「るんでおれいかおよびまーあうあの者ものさんいふとこれせで
かるでこまるりまーこぶきけさんのめがあのごとくあいまでい
あいそもつきまーこぶつぶつのおせをうけるふめんでたぐく
あやういめをこんます　さん天狗のうちのお方ぐどもるあ
いありませんがそのやうるういあうの亡者さんいうことも
ありません「そまでい六狗のうちをや人狗ふきまりまーこ

ぶうぞこのけーきをまこーあんせるさまとんでき人「サカク奚へいうて
どらんるさん「こまらくよいふうけいろるおの川いるんというまこて
「こまぶめいどの三除川「いきまこあやたぶきいさまりいかんべうて
三除川の橋も赤もるけまび者やたぶでちあて　あさ男女あの
川のふちふもちあいせてこぶいふをこうる川とさてもりこと
が「川イ　むーしいさぶでありまこぶちぶごろ怪たさあ　こふ冥府
さあが六狗のごういかくふつき橋もみけ赤もあのやうふとうめて
あそぶやうふるりまーこ「さていい怪狗さあい凡人でいこざるまい
「るーくぶんあんでいるいあんるふをかくさんうこくーこん玄のうんの

ことをしてあけてもくまでも琴ノ三味せんであそんでさぞ
ゞさんだごろうりいつさいの天人玄の上の親はふかけんむざゝ
さることをたいさまてあのくを業をせよとごふらくとやゝ
るく天女さちいさゝづゝ慶者あるひこゝおごうみげんのるいあの
茅ゝ人せ揚ちの出うせぎをいこゝまるて「イヱそうるくているらぬ
さけ天上のざゞしらの日天ゝ月天ゝさゝ人おうせぎるのさゝ
めをその光をうけるのめざむざゝをさるいんまいるいゝくむう
の大家あて笛やつゞきたいこゝ三味せんの大ゝしゞきゝまるゞ
あまいるんでぎゝます「あまいゝ三除川の橋うぎゝやしりゝ



拵ゑ物舎さてはまく方の悟りさあがこの正月十六日ゆるさるゝ大
舎がゝゆのびさ史六月のうちふゆる名人の名丈こゆせん
ひさゝゝ女藝者おどりゆ方をべて藝人と名のつくものを取
揚ゆさゝ大舎ゆまびゆんゆいかゝて考ひ也へをゆこゆんゆ
ゆくゆまゝおいでゆまゝ人人の若が多くゆつまびおゆ
ねの亡若ゆまうとおいでがゆらう「さてをゆまがまゆがゝゝゝゝ
でゆまゆゝ人人ゆおゝ孫びゆまゆ極ゆおさがまびつゝ
ゝの役目でゆけまびをうゆもんやくゝゆるひてゆんヤレくおせゝゆ
ゆまゝさおゆんゆゆゝびまゝおゆゆゝまゝまゝまゝまゝおいゝまゝ

いゝまゝまゝゝ第ゝ世をゝまゝいがゝ「ゝまゝくゆゆいゝがゝゝゝゝんと
ゆゆゆゝの女四ゆゝのゆうゆゆゝゝゆゝゆゝゆ

大鈍託新文鬼談二号 終

三世野悟道子地獄の罪人を引率して極楽の悪弊を決問ふ及ぶ條り

同三号

豊年五穀祭号 理解新文

万亭應賀著

文名 皆化 和談三才圖笑

万亭應賀著

新冥途奥言 画入 伝授本

万亭應賀著

万亭突英

音曲獨免許

嗚呼瑞穂の外国ごとにその文句の古今を釈し自然のふぶし老若男女の神のつるくさ弟のあまりまねをしてくあり

發行

西京御幸町 發屋徐兵衛
大坂心齋橋通備後町 近江屋平助
仝 仝
東京日本橋通二丁目 境屋卯八郎
仝 二丁目 須原屋茂兵衛
仝 仝 山城屋佐兵衛
仝 通四丁目 小林新兵衛
仝 芝神明前 須原屋佐助
仝 横山町二丁目 和泉屋市兵衛
仝 浅草茅町二丁目 和泉屋金右衛門
仝 浅草廣小路 須原屋伊八
仝 馬喰町二丁目 浅倉久兵衛
仝 横山町一丁目 森治兵衛
仝 通油町 山崎寺萬次郎
藤岡屋慶次郎

静岡 三保屋 上之店

010190522968